

広領域連携型基幹研究プロジェクト
「異分野融合による総合書物学の構築」基本計画

平成28年3月28日

人間文化研究機構

一部改定 平成29年4月 1日

1 広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の推進

主導機関名 国文学研究資料館

統括代表者 谷川 恵一・教授

【研究概要】

我が国の書物は、長い時間を経て今に伝えられてきた。なかには千年を超える時間を経たものもある。それらには膨大な情報が蓄積されている。文字情報はもとより、装幀法、紙質、墨、綴じ糸などにそれぞれ意味があり、そこからさまざまな情報が読み取れる。が、従来これらの情報は十分には読み取られてこなかったと言って良い。本事業プロジェクトは、歴史的典籍の「書物」としての面に着目して、従来の書誌学に異分野融合の観点を加え、「総合書物学」という研究分野の構築を目指す。歴博、国語研、日文研3機関の共同研究を基礎に、国文研が主導機関として、常に相互の連携を図り、分野横断的な研究の進展を促し、新たな研究分野である「総合書物学」を構築する。具体的には、①歴博は、書物を従来とは別の観点から読み直すことによって、これまでにない多分野からの研究参画を促す研究を行い、②国語研は、文字情報が書物の諸要素とどう関わるかを研究することにより、書物の意義を明らかにし、③日文研は、キリシタン文学を継承した幕末以降来日の宣教師の書物を、文字、画像、音声、映像資料を通して考察する。④国文研は、これら各ユニットが、成果を発表し、交流することを促し、「総合書物学」の基盤を構築してゆく。これらの成果を、「総合書物学」という学問分野に確立すべく、教育プログラムとテキストを作成し、大学院で講義を行い、「総合書物学」の概念が社会に広く認知されるようにする。「総合書物学」が認知されることにより、書物がまさに書物という形で今に受け継がれていることにより、様々な情報が蓄積され、日本文化が今に伝わる原動力になっていることが広く知られるようになる。

2 「異分野融合による総合書物学の構築」は、以下の研究ユニットから構成される。各研究ユニットのテーマおよび、研究概要は次のとおりである。

①「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」

機関名 国立歴史民俗博物館

代表者 小倉 慈司・准教授

【研究概要】

法制書『延喜式』には「古代の百科全書」と呼ぶにふさわしい多様な情報が盛り込ま

れている。まずは写本研究に基づき新たな校訂本文を作成した上で、その現代語訳・英訳を試みつつ、文理の枠を越えた様々な分野と協働して研究を進めることにより、新たな視点に基づいた研究を生み出して「総合書物学」の構築を促すとともに、その成果を海外も含めて広く情報発信していく。

②「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」

機関名 国立国語研究所

代表者 高田 智和・准教授

【研究概要】

文献学と言語計量の手法により、言語単位（単語、文節、句、文など）と表記・書記単位（仮名字体、漢字字体、連綿文字列、句読点等表記記号など）と書物や版面の形状（装丁、料紙、版型、頁遷移、行遷移など）との相関関係を明らかにする。また、既存の日本語歴史コーパスに表記情報・書誌形態情報を加え、言語から見た書物、書物から見た言語を分析するための共同利用基盤を作成・提供することで、異分野融合による新領域「総合書物学」の形成に寄与する。

③「キリシタン文学の継承：宣教師の日本語文学」

機関名 国際日本文化研究センター

代表者 郭 南燕・准教授

【研究概要】

室町末期から徳川初期にかけて成立した「キリシタン文学」の伝統は、幕末以降に来日した宣教師が執筆した日本語書籍において継承されてきた。本研究は文字資料を中心に、映像・音声資料を含む、総合書物学的視点から、そうした作品群を、成立、出版、流布、受容の側面において検討し、近代日本の宗教、思想、言語、文学、美術に与えた影響を解明する。

3 研究成果の公開・可視化

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

①報告書・成果論集

機関連携：各研究ユニットにおける「総合書物学」にかかわる研究成果をあつめた論集を作成する。この論集の成果は、後述の「総合書物学」の大学におけるテキストの根幹をなす。(平成30年度)

歴博：中間報告として『国立歴史民俗博物館研究報告(特集号)』を刊行。(平成31年度)

国語研：なし

日文研：1)『宣教師の日本語文学選集』(全20巻)を順次刊行。(平成29年度～平成

33年度)

- 2) 『宣教師の日本語文学』の執筆と刊行。(平成28年度)
- 3) 『上海土山湾における教育、宣教、印刷、美術工芸品の制作』の執筆と刊行。
(平成29年度)
- 4) 論文集『日本における布教と日本語』の執筆と刊行。(平成30年度)
- 5) 論文集『上海土山湾から日本に渡った宣教関係の美術工芸品：幕末から近代までの東西交流』の執筆と刊行。(平成31年度)
- 6) 論文集『宣教師の作った演劇：能、戯曲、映画、聖劇、オペラ』の執筆と刊行。(平成32年度)

②シンポジウム・予稿集

機構連携：1) 年1回のシンポジウム(研究者向け)を開催し、「総合書物学」の周知に努め、従来書物学に関わらない分野の研究者の参画を促す。(平成28年度～30年度)

2) 総合研究大学院大学において行った講義を元に、大学の教員向けのデモンストレーション授業を行い、大学教育における「総合書物学」の普及活動を行う。また、高校、中学生向けの若年向けプログラムを作成し、学問分野の認識を高める。(平成32年度以降)

歴 博：1) 『延喜式』に関するフォーラムを開催。(平成28年度)

2) 工芸(容器)・薬品分野の成果を踏まえたシンポジウムを開催。(平成30年度)

3) 国際シンポジウムを開催。(平成33年度)

国 語 研：成果公開のためのシンポジウムを開催。(平成33年度)

日 文 研：国際シンポジウムを開催。(平成33年度)

③データベース

機構連携：なし

歴 博：1) 分科会研究関連文献を網羅した文献目録データベースを公開。(平成31年度)

2) 『延喜式』本文データベースを公開。(平成33年度)

国 語 研：1) 「仮名字体データベース」を公開。(平成30年度)

2) 「版本を対象としたコーパス」を公開。(平成30年度)

3) 「写本を対象としたコーパス」を公開。(平成33年度)

日 文 研：1) 「宣教師著作関係の文献目録」を公開。(平成28年度)

「キリシタン文学に関する美術、工芸品関係の目録」を公開。(平成29年度)

- 2) 「キリシタン文学に関する戯曲、演劇、映画関係の文献目録」を公開。(平成31年度)

④その他

なし

(2) 教育プログラム等

本事業では、新しい学問分野として「総合書物学」を創出するために、大学教育での新たなプログラムを作成することを指標としている。事業に参加する歴博、日文研、国文研が属する総合研究大学院大学において、共通科目「総合書物学」を開設し、研究の成果を実際に講義し、その講義内容を検討することにより、教育プログラムを充実させてゆく。さらに、それを、大学教育で使用できるように改良して、教育用のテキストを作成する。そのテキストを使用して、全国の大学で教育が行われるように働きかけ、学問分野としての確立を目指す。

(3) 展示等

機構連携：4機関連携で、「総合書物学」が普及するように、研究の優れた成果を展示する。

具体的には、年1回程度シンポジウムに合わせて国文研で展示を行う。

歴博：1) 歴博において一般向けミニ企画展示を開催。(平成28年度)

2) 歴博において『延喜式』の技法・物品に関する特集展示を開催。(平成33年度)

国語研：なし

日文研：企画展示「キリシタン文化の継承：屏風絵、世界地図、美術、工芸品」を開催。(平成33年度)

4 研究プロセスの国内外に向けた情報発信

- 1) 4機関が連携して、研究期間の前半である平成28年度から平成30年度まで、年1回の研究者向けのシンポジウムを開催し、「総合書物学」の周知に努め、従来の書誌学では関わりを持たなかった異分野の研究者に対して研究への参画を促し、平成30年度には、研究成果を集めた論集を作成する。
- 2) 平成32年度からは、これまでの研究成果を基に大学院教育プログラムを作成し、まず総合研究大学院大学において「総合書物学」の科目を開設し、講義を行う。その後、実施された講義内容を検討し、科目の充実を図るとともに、大学院の講義内容を大学教育にも適合できるよう改変し、大学教育用のプログラムを作成する。「総合書物学」の研究成果及び大学教育プログラムは、ブックレット等で国内外に情報発信するとともに、「総合書物学」の講義を大学で行うよう企図し、「総合書物学」の普及に努める。
- 3) 最終年度である平成33年度には、「総合書物学」を一般向けに紹介するため、イベントの開催とブックレットを作成する。

5 若手研究者の人材育成の取組み

本プロジェクトでは、各研究ユニットに若手研究者が特任助教として配置されている。各人は、各研究ユニットの推進のため活動する一方、「総合書物学」確立のため、研究ユニット間の連絡を取り合い、プロジェクト全体の内容を深く把握する立場になる。新しい学問である「総合書物学」は、これら特任助教がもっとも内実に関わる存在となる。本プロジェクトで創設された「総合書物学」は、これら特任助教によって、大きな展開をもたらすと期待できる。また、特任助教は、「総合書物学」普及の活動も主体となって行うため、他分野の研究者や一般の社会ともかかわりながらプロジェクトを動かす経験を積むことになり、人材育成として大きな意義がある。

6 全体計画（主要活動）

年 度	取 組 内 容
平成 28 年度	<p>推進会議：①全体研究会（1回）②各ユニットの交流会（2回）③成果公表の検討会（1回）④シンポジウム開催</p> <p>歴博：①工芸（金属加飾・染織・容器等）、薬品、食品各分野ごとの分科会発足、物品・文献資料の整理・分析（随時）②全体研究集会（2～3回）③校訂本文の検討及び写本・版本研究の調査（科研申請）④分科会研究対象関連本文の現代語訳作業の準備⑤データベース作成方針の検討⑥一般向けフォーラム・ミニ企画展開催</p> <p>国語研：①コーパス精緻化のための基礎研究の研究会（随時）②版本を対象としたコーパスの設計③仮名字体データベースの作成のための検討会（随時）</p> <p>日文研：①外国人宣教師の活動と著作物の調査（九州を中心に）②調査、研究交流のためのワークショップ（1回）③宣教師著作関係の文献目録の公開④単著『宣教師の日本語文学』の執筆と刊行⑤『宣教師の日本語文学選集』を準備（科研申請）</p>
平成 29 年度	<p>推進会議：①全体研究会（1回）②各ユニットの交流会（2回）③成果公表の検討会（1回）④シンポジウム開催</p> <p>歴博：①分科会ごとの物品・文献資料の整理・分析（随時）、重点研究対象の選定②全体研究集会（2～3回）③校訂本文の検討及び写本・版本の調査④現代語訳作業開始、英訳作業の準備⑤データベース作成方針の策定</p> <p>国語研：①コーパス精緻化のための基礎研究の研究会（随時）②版本を対象としたコーパスの作成③仮名字体データベースの作成</p>

	<p>日文研：①外国人宣教師の活動と著作物の調査（中国、近畿を中心に）②調査、研究交流のためのワークショップ（1回）③美術、工芸品関係の目録の公開④単著『上海土山湾における教育、宣教、印刷、美術工芸品の製作』の執筆と刊行⑤『宣教師の日本語文学選集』（第1～3巻）を共同編集、刊行</p>
<p>平成30年度 (中間自己評価)</p>	<p>推進会議：①全体研究会（1回）②各ユニットの交流会（2回）③成果公表の検討会（1回）④成果公表のための論集刊行⑤4機関連携のシンポジウムを開催し、自己中間評価実施</p> <p>歴博：①分科会ごとの物品・文献資料の整理・分析（随時）、中間成果（論文等）のとりまとめ②全体研究集会（2～3回）③校訂本文の検討及び写本・版本の調査④現代語訳作業、英訳作業開始⑤データベースの整理⑥工芸（容器）・薬品分野の成果を踏まえたシンポジウム開催</p> <p>国語研：①コーパス精緻化のための基礎研究の研究会（随時）②版本を対象としたコーパスの公開、検証③仮名字体データベースの公開</p> <p>日文研：①外国人宣教師の活動と著書の調査（関東地方を中心に）②調査、研究交流のためのワークショップ（1回）③戯曲、演劇、映画関係の文献目録の作成④論文集『日本における布教と日本語』の執筆と刊行⑤『宣教師の日本語文学選集』（第4～6巻）を共同編集、刊行</p>
<p>平成31年度</p>	<p>推進会議：①全体研究会（1回）②各ユニットの交流会（2回）③成果公表の検討会（1回）④総合研究大学院大学での共通科目「総合書物学」開設の準備</p> <p>歴博：①分科会ごとの物品・文献資料の整理・分析（随時）、重点研究対象の調査・解析②全体研究集会（2～3回）③校訂本文の検討及び写本・版本の補足調査④現代語訳及び英訳作業⑤分科会研究対象関連文献を網羅した文献目録データベース公開、現代語訳・英訳付き本文データベース整理⑥中間報告としての『国立歴史民俗博物館研究報告（特集号）』刊行</p> <p>国語研：①コーパス精緻化のための基礎研究の研究会（随時）②写本を対象としたコーパスの設計③仮名字体データベースに写本の字体情報を追加</p> <p>日文研：①外国人宣教師の活動と著作物の調査（東北地方を中心に）②調査、研究交流のためのワークショップ（1回）③戯曲、演劇、映画関係の文献目録の公開④論文集『上海土山湾から日本に渡った宣教関係の美術工芸品：幕末から近代までの東西交流』の執筆と刊行</p>

	行⑤『宣教師の日本語文学選集』（第7～10巻）を共同編集、刊行
平成32年度	<p>推進会議：①全体研究会（1回）②各ユニットの交流会（2回）③成果公表の検討会（1回）④シンポジウム開催⑤総合研究大学院大学での共通科目「総合書物学」開設、教育プログラム及びテキストの作成、一般向けブックレット刊行</p> <p>歴博：①分科会ごとの物品・文献資料の整理・分析（随時）、重点研究対象の調査・解析②全体研究集会（2～3回）③校訂本文の確定④現代語訳及び英訳作業⑤文献目録データベース追加増補、本文データベース整理</p> <p>国語研：①コーパス精緻化のための基礎研究の研究会（随時）②写本を対象としたコーパスの作成③仮名字体データベースとコーパスの連携</p> <p>日文研：①外国人宣教師の活動と著作物の調査（北海道を中心に）②調査、研究交流のためのワークショップ（1回）③単著『日本政治に与えた宣教師の役割』、『日本における宣教師の辞書』の執筆と刊行④論文集『宣教師の作った演劇：能、戯曲、映画、聖劇、オペラ』の執筆と刊行⑤『宣教師の日本語文学選集』（第11～15巻）を共同編集、刊行</p>
平成33年度 (最終自己評価)	<p>推進会議：①全体研究会（1回）②各ユニットの交流会（2回）③成果公表の検討会（1回）④「総合書物学」を大学で開講するための教育プログラムの検討、テキストの作成⑤4機関連携で「総合書物学」のシンポジウム開催⑥自己最終評価を実施</p> <p>歴博：①分科会ごとの物品・文献資料の補足整理、重点研究対象の調査・解析②全体研究集会（1～2回）③校訂本文の補足整理④現代語訳及び英訳作業⑤文献目録データベース追加増補、本文データベース公開⑥国際シンポジウム開催、延喜式の技法・物品に関する特集展示を開催</p> <p>国語研：①コーパス精緻化のための基礎研究の研究会（随時）②写本を対象としたコーパスの公開、検証③仮名字体データベースとコーパスの連携の検証④成果公開のためのシンポジウム開催</p> <p>日文研：①6年間の研究調査の成果をまとめる展覧会「キリシタン文化の継承：屏風絵、世界地図、美術、工芸品」を開催②『宣教師の日本語文学選集』（第16～20巻）を共同編集、刊行③国際シンポジウムを開催</p>

※展示活動については、主催共催機関の都合によりスケジュールの変更がある。

8 計画、報告及び点検・評価

(1) 年次計画

広領域連携型基幹研究プロジェクトの主導機関は、各研究ユニットの毎年度の研究及び事業の計画（以下「年次計画」という。）をとりまとめ、推進会議に提出する。推進会議はこれを審議し、総合人間文化研究推進センター（以下「推進センター」という。）に提出する。

推進センターは、広領域連携型基幹研究推進評議会（以下「評議会」という。）に年次計画の審議を依頼し、評議会の意見をふまえ、年次計画を決定する。

(2) 年次報告・点検

主導機関は、各研究ユニットの毎年度の事業実績報告（以下「年次報告」という。）をとりまとめ、推進会議に提出する。推進会議はこれを審議し、推進センターに提出する。

推進センターは、評議会に年次報告に基づく点検（以下「年次点検」という。）を依頼し、評議会が作成した点検・評価報告書を確認し、点検結果を確定する。また、推進センターは、点検の結果必要と認めるとき、改善措置を講ずるよう推進会議に提言する。推進会議は提言を受けたとき、その趣旨に沿って、必要な是正措置を協議決定する。

(3) 評議会における審議・年次点検

評議会は、推進センターからの依頼を受け、この基本計画及び年次計画を審議するとともに、年次計画に基づく研究及び事業の実績について点検・評価報告書を作成し、推進センターに提出する。また、必要と認めるときは改善措置を講ずるよう、推進センターに助言する。

(4) 中間評価・最終評価

推進センターは、事業3年次（平成30年度）及び事業最終年次（平成33年度）に、当該期間までの実績について評価を実施する。

中間評価、最終評価については、(2)「年次報告・点検」のプロセスと同様に推進センターが実施する。